戦後イタリア都市計画による農業地域とその景観の保存活用に関する通時の研究

DIACHRONIC STUDY OF CONSERVATION AND UTILIZATION OF HISTORICAL LANDSCAPE IN AGRICULTURAL REGIONS WITH ITALIAN TERRITORIAL PLANNING AFTER SECOND WORLD WAR

植田 暁*
Satoshi UEDA

In Italy, the conservation and utilization of historical cities, landscapes and regions are conceptual values that have always coexisted with modern urban planning. With post-World War II reconstruction, urban planners began studying ways to conserve historical landscapes in agricultural regions. They established planning methods from a botanic perspective and human geography perspective. Since 2006, in their cultural landscape management plan, urban planners have connected the conservation of physical historical landscape to the recuperate of social and economic foundations of a region. In such way, they have completed a scheme that draws on the history of a region.

Keywords: Tessuto, Territorio storico, Paesaggio storico, Regional resource, Cultural landscape, Management plan

テススト, テリトリーオ・ストリコ, パエサッジョ・ストリコ, 地域資源, 文化的景観, 保存管理計画

1. はじめに

イタリアの歴史的地域資源の保存と活用は、建築や建造物、都市や景観の真正性を尊重した物理的な成果のみではない。歴史のなかで培われた地域のコミュニティや経済活動に付加価値を与え、持続可能な社会として再生することも目的とされている。とくに近年は「(歴史的) 景観＝パエサッジョ (・ストリコ)」の保存と「(歴史的) 地域＝テリトリーオ (・ストリコ)」の活用の成果がめざましい。故郷をさすパエーゼから派生した単語であるパエサッジョに「先人の営みが生み出した造形」という意味、領土をさすテリトリーオに「都市と周囲の農業地域や自然の有機的な結びつきからなる自立した定住環境」という意味が込められてきたことは、伝統的とすらいえる。

1.1 研究の背景、我が国における既往研究、本研究の目的

我が国とイタリアの農業地域ではとくに、(1)近代化の過程におけるテリトリーオという意識の喪失、(2)第2次世界大戦後のパエサッジョの著しい変容、以上の2点課題が共通していた。後者の原因は農業改革と働き手の流出による人口減少、経営規模の拡大、耕地の拡張、機械化と多岐にわたった。イタリアでは審美的な景観の保護を目的とした法が1922年に制定されたものの、制御しうるパエサッジョの範囲は狭く、テリトリーオは明確に定義されなかった。大戦直後には、パエサッジョは用途ごとに細分化された土地利用の表徴、テリトリーオは地域計画の範囲としてのみ理解される傾向にあり、歴史的価値の喪失が危惧された。パエサッジョ・ストリコの保存とテリトリーオ・ストリコの活用に向けた検討は、都市計画界において戦後復興の一環として着手され、1980年代後半には、その将来的な価値が再評価された。この延長上に人文地理学者が20世紀初頭に

提唱し、ユネスコの世界文化遺産の分野のひとつとなった文化的景観の保存管理計画と都市・地域計画を結びつける取り組みもある。

我が国には市壁が囲む「歴史的市街地＝チェントロ・ストリコ」の保存活用、都市計画、文化財や景観財の保護^{注1}、環境価値の高い地域を保護する制度^{注2}、歴史と観光を結びつけた地域経営手法^{注3}にかんする、イタリア都市研究の豊かな蓄積がある。一方、農業地域のパエサッジョの保存とテリトリーオの活用^{注4}にかんする報告は少ない。

拙稿は地域づくりに結実した農業地域の保存活用の取り組みを、都市計画の理念と計画手法の発展の系譜として俯瞰することを目的とする。とくに(1)パエサッジョの定義が対象領域を広げ、複合化し、テリトリーオと一致するに至った過程、(2)定住環境の有機的な結びつきや全体像を、詳細な分析を基に横断的なスケールから定義するテスストというイタリアで独自の発展を遂げた概念に着目する。

1.2 研究の方法

執筆にあたり、戦後に刊行された都市・地域計画の研究書、計画書、行政資料の読解をもとに考察した。そこに引用された美学、地理学、植物学の文献、古地図も参照した。具体的記述を旨とし、啓発的先駆的と考えうる事例を取り上げ、専門家にもヒアリングした。

時間認識として、(1)目標と展望を設定し、先駆的实践を伴う思想醸成期にあたる戦後から60年代初頭まで、(2)パエサッジョとテリトリーオを定義し、農業地域のパエサッジョ・ストリコの分析手法を構造的に確立した1960年代から80年代初頭まで、(3)農業地域のパエサッジョ・ストリコの保存が社会的経済的政策的に可能となり、実践された1990年代初頭から今日まで、以上の3区分とした。

空間認識として2.1に述べる、テスストという視点を軸とした。

* 特定非営利活動法人景観ネットワーク 修士(工学)

NPO Network for community development with landscape, M.Eng.

2. 第1期・歴史的・地域資源の保存活用に向けた基盤づくり

都市計画法が1942年に制定されたイタリアの特徴として、(1)ゾーニングを手法として、我が国の5地域にあたる国土全域を制御する近代都市計画を実践すること、(2)その担い手が率先してチェントロ・ストリコの保存活用を推進したこと、以上の2点がこれまで紹介されてきた^{注5}。マリオ・ゾッカやルイジ・ピチナートら都市計画家による、ルネサンス期よりも前に完成した中世の市街地の調査は先見的であり、とくにピチナートは今日でいう「都市形態＝モルフォロギア・ウルバーナ」を7つに類型化し、都市調査の礎とした。

チェントロ・ストリコをはじめとした歴史的・地域資源の保存活用と近代都市計画の両立は、都市計画法の施行直後から全国都市計画協会(以下INU)において検討された。INUに設置された作業部会は「復興にむけた都市計画と建造物の展望^{注6}」を1944年から翌年にかけて発表した。(1)農業、(2)産業と商業、(3)観光と環境、以上を復興の3つの枠組みとして提唱しつつ、チェントロ・ストリコの保存活用、パエサッジョの眺望、環境、以上の保護すべき3要素も明文化した。

2.1 テスストという概念の導入と都市計画界への普及

テスストという定住環境を俯瞰する概念は1950年に、都市を対象にガストン・バルデとサヴェリオ・ムラトリーが「都市組織＝テススト・ウルバーノ」を提唱したことにより、注目された^{注7}。両者とも不動産登記資料(カタスト)の活用を前提とした。バルデによる住民の社会的属性と建造物の利用状況を組み合わせた「都市のかたち＝フォルマ・ウルバーナ」は、のちにカルロ・アイモニーノとアルド・ロッシが起源を辿って体系化した都市論の、形態学的視点に含まれる。ムラトリーは1950年からヴェネツィア市、次いでローマ市のチェントロ・ストリコを「建築類型＝ティポロギア・エディリツィア」の視点から分析した。機能を指標とするのではなく、歴史的に形成された空間の特質を類型化の根拠とした。市街地を有機的かつ不可分な組織体として論ずるうえで、個々の建造物を「テスストを構成する建造物＝テススト・エディリツィオ」、市街地を「テススト・ウルバーノ」と定義した。都市形態学と建築類型学、双方の手法は、市街地を定性的に分析する基礎となり、テスストを冠した用語は都市計画、都市史、建築意匠の各分野で急速に普及した。都市計画界の例としては、1957年に開催されたINUの第6回全国大会「都市と田園のパエサッジョの保存と有効利用」の採択文、ジョヴァンニ・アステngoを中心に1960年に設立された全国歴史芸術都市保存協会(ANCSA)の設立大会の採択文を挙げることができる。

2.2 啓発的・テリトリーオ研究とパエサッジョという課題の発見

主たる社会的・経済的営みを農業とする中山間地域のテリトリーオ調査が1955年には各地で開始された。国が農業の近代化を標榜して改革を進めるなか、中山間地域の過疎化は急激に進み、荒廃の末に放棄されかねない危機に瀕していた。地場の産業構造を再生する持続可能な手段を模索する過程で、小規模なチェントロ・ストリコや農業地域のパエサッジョが保存活用の対象として着目された。代表的な研究として、プリニオ・マルコーニによるテヴェレ川中流域、マリオ・コッパによるウンブリア州、エドアルド・デッティによるリグーリア州とトスカナ州の調査をあげることができる。マルコーニは農業地域のパエサッジョを審美的・歴史的視点から記述し、コッパ、デッティは歴史的視点から構造的に読みとく展望を示唆した。

テリトリーオの分析と地域再生に向けた提言は、より啓発的内容

を伴った。マルコーニは計画対象として、テヴェレ川の分水嶺を根拠とした24基礎自治体(以下コムーネ)を選定した。コッパはローマ時代の開拓の範囲、中世のコミュニティの領域、今日の行政区界としてのテリトリーオが、いずれも一致しないことを導いた。デッティは中世の都市国家のテリトリーオに着目した。縁辺部の農業地域では戦争中ですら隣国と交流が続き、地域社会が維持されていたという史実を計画範囲のモデルとして、広域の地域計画を提唱した。

2.3 都市計画マスタープランとパエサッジョ・ストリコ

1954年に都市計画マスタープランの策定時限を1961年までに定めた法が施行された。マスタープランの策定にあたり、多くの都市が中心課題に据えたのが市街地再生だった。チェントロ・ストリコを職住近接型の居住環境として再生すべく、新市街地を隣接させて造成し、都市を一体化し、相互の機能を補完する手法は啓発的だった。

チェントロ・ストリコと農業地域のパエサッジョ・ストリコの一体性に着目した例外的な都市計画マスタープランは、アステngoによるアッシジ市の計画(1957年)と、ジャンカルロ・デ・カルロによるウルビーノ市の計画(1964年)のみだった。アステngoは計画に先立ち、(1)行政区界としてのテリトリーオは、都市国家アッシジが12～13世紀に形成したテリトリーオ・ストリコの2/3にすぎないこと、(2)コムーネ全域のパエサッジョが自然美保護法に基づき守られたこと、以上2点から行政区界全域を土地利用規制の対象とした。農業地域全域の個票や収量を調査をし、農地改良や作付けの変更にたいして、地区詳細計画に匹敵する要件の農用地利用計画の提出を義務づけた。

とくにチェントロ・ストリコをとりまく農地を手厚く保護した。デ・カルロは今日の行政区界としてのテリトリーオのうち、チェントロ・ストリコと一体をなし、都市形態の一部として保存すべきパエサッジョの範囲を選定した。そのうえで地形に応じて景観重要稜線、眺望点、景観軸や景観視円錐を設定した。新市街地の造成や企業誘致のため、建造物の容積規制や敷地の外周緑地の設置条件も整えた。

2.4 本章の考察

戦後の復興の展望に記された理念は体系化には至らなかったものの、多角的取り組みにより、明らかに実現の可能性が共有された。

テススト・ウルバーノという2.1に述べたイタリア独自の概念は、その抽象性ゆえに、市街地の有機的な全体像を具体的に定義する立脚点となり、普及した。研究者や計画家にとって、テスストを定義することは自明となり、そのことが次章以降に述べるように、パエサッジョやテリトリーオを定義づけるうえでも貢献した。

この時代にはパエサッジョ・ストリコの保存の重要性は意識されていたものの、(1)テリトリーオとは別の課題として考えられていたこと、(2)パエサッジョの分析や計画手法を確立する必要性が明らかになったこと、が2.2に述べた各事例から指摘できる。これらの事例は中山間地域を含む零細な農業地域の活性化という課題に効果的に取り組むために、複数のコムーネの協働やかつての都市国家を連動させた再生を想定し、広域化する利点に立脚した。この共通した見解は、テリトリーオ・ストリコの価値の再評価を促したといえる。

パエサッジョを保存する上で、2.3でとりあげた都市計画マスタープランの2事例において、アステngoは都市計画的な手法を、デ・カルロは建築的な手法を採用した。前者の手法がこの後、広く普及した。とくにアステngoが農地の土地利用規制と個票調査の両立を検討したことは、後年に大きな示唆を与えたと考えられる。

3. 第2期1 農業地域のパエサッジョとテリトーリオの複数の定義

レオナルド・ベネーヴォロは2.1でとりあげた第6回INU全国大会で、パネリストのひとりとして「環境のなかで多様な要素が共存した状態」こそパエサッジョの本質と論じた^{注8}。パエサッジョはこの大会決議で、従来の審美性に加え、原生的自然という環境と、先人の営みという歴史から生じた人文的空間としても定義された。後者には農業地域も含まれた。このときから(1)審美的、(2)環境的、(3)歴史的側面という複合化すべき3つの視点が確立されたと理解できる。

他分野でも同じ時期にパエサッジョの定義を巡り、議論された。

大衆の啓発面では、地理学者アルド・セステイーニが、ついで都市・地域計画の分野でガイド・フェッラーラが、専門家による写真解説という表現をとおして、上記の3つの視点からパエサッジョを俯瞰した。次節ではこれらの視点を概観する。

3.1 戦後に確立されたパエサッジョ・ストリコの3つの定義

3.1.1 審美的視点から定義されたパエサッジョ・ストリコ

ルネサンス以降、田園生活や領地の財の豊かさが絵画の背景として描かれるようになり、のちに主題となり、美術評論を経て、パエサッジョそのものの審美的価値が確立された。哲学者にして歴史家だったベネデット・クローチェが、1902年に近代思想のなかでパエサッジョを「美」と定義して以来、その価値観が今日まで受け継がれた。

パエサッジョの保護を定めた制度的概念は18世紀にさかのぼった。20世紀に入り、文筆家にして行政官だったルイジ・パルパリオロが、1904年に農業にかんする総合的な法体系を、1913年にパエサッジョという言葉を含む芸術全般を保護する法体系を構想した。公教育大臣に就任したクローチェは1920年法案第204号を上院に諮った際の演説で、審美的景観のある側面として「農場の喜び」に言及した。同法案は景勝の保護を目的とした1922年法第778号「自然美と歴史的価値のある不動産の保護法」(通称クローチェ法)として公布された。引き続き施行令が検討されたが、詳細な保護規定を求める国民運動もおこった。パオラ・ファリーニは1931年2月にイタリア観光協会が主催した法改正を求める会議を重視する。この会議でパルパリオロはパエサッジョの保存には都市計画による制御が不可欠と論じた。これらの取り組みは景観計画の策定を義務づけた1939年法第1497号(自然美保護法)に結実し、その施行令も翌年に成立した。

戦後になり、哲学者ロザリオ・アッスントはクローチェの研究を継承しつつ、時間の概念を導入した。パエサッジョを時の流れが凝縮され、記憶を投影しうる対象と定義した。農業地域のパエサッジョは常に移ろい、季節ごとに繰り返すことに意義があると指摘した。

3.1.2 環境的視点から定義されたパエサッジョ・ストリコ

植物学者ヴァレリオ・ジャコミーニは従来のパエサッジョの定義に、生態学という自然科学の側面を重ねて啓発した。パエサッジョを生物圏(バイオスフィア)^{注9}と関係づけ、環境面から論じた。その成果は、(1)農業地域のパエサッジョ・ストリコをバイオスフィアの重要な要素として位置づけたこと、(2)生物圏の保護を現実化すべく取り組んだこと、以上の2点である。

ジャコミーニは2次の自然に、原生的自然を保護する緩衝地域としての役割りを期待した。なかでも自然と調和した伝統的な農業地域を最重要視し、そのパエサッジョの保存を訴えた。近代農業が環境保護に寄与し得ないことを危惧し、その原因を専門家の職域の狭さに起因するとした。異分野の研究者や専門家が協働する場の必要

性を唱え、その実践の場として1950年には10名の会員、自身も会長をつとめた「庭園と景観の設計者協会」を設立した。1966年には、原生的自然を構成する動物、植物、鉱物の関係をテスト、その表徴をパエサッジョ、複数のパエサッジョが連動した状態をテリトーリオ、自然保護公園として設立すべき規模を州の広さ以上と論じた。この論を景観生態学と呼んでいたと、ヴァレリオ・ロマーノは指摘する。ただしジャコミーニによるテストは、原初的な有機的な仕組み、パエサッジョは自然美を指し、これら2つの語彙が、拙稿でとりあげる他の語彙とは相容れない点に留意したい。

3.1.3 歴史的視点から定義されたパエサッジョ・ストリコ

地理学者ブルーノ・ニーチェは、1950年にINUの機関誌「ウルバニスティカ」に寄稿した論文「地理学と都市計画」において、地理学的視点を都市・地域計画に導入する意義を唱えた。この時期に、イタリアの地理学が刷新された。レナート・ピアズッティは科学的根拠に基づくパエサッジョを論じ、セステイーニはオットー・シュリューターが提唱した文化的景観を啓発した。

農業地域のパエサッジョ・ストリコにかんする研究は、1950年代の後半から急速に進んだ。農業史家エミリオ・セレーニ、人文地理学者であるルーチョ・ガンビやエウジェニオ・トゥッリが新たな視点から論じた。セレーニとガンビは情報を共有し、協働もしていた。

セレーニによる成果は、(1)農業者の立場から農業改革の課題を明らかにし、とくに小規模農業者が新たな弱者層になりつつあると指摘したこと、(2)イタリアの農業史を俯瞰したこと、(3)ルネサンス初期にはすでに農業地域の景観計画にあたるものがあつたと論じたこと、以上の3点である。とくに(3)を根拠に環境と歴史を守り、農業者と農産物の実情に即した景観計画の普及を図る必要性を説いた。

ガンビは歴史的視点を人文地理学の本質と論じ、パエサッジョ・ストリコを分析的に記述した。安定した地域社会のメカニズムが歴史的に重層したさまを文化的景観とした。戦後の農業地域を、農家の経営規模や主たる作付けを指標として類型化し、地域ごとに残された多様性を評価した。イタリア半島における5000年の定住の歴史を、環境との関係から5段階に分類し、伝統的な混作農法や生け垣で囲まれた農地(カンポ・キウゾ)全てを等しく評価する視座を築いた。

トゥッリは環境的視点、歴史的視点、双方を統合する立場からパエサッジョを論じた。地理学者カール・サウアーが提唱した文化的景観にも言及し、農業こそ、最も雄弁に文明を語るものとした。都市・地域計画学の分野が論ずるパエサッジョが(1)狭い土地利用をさすにすぎないこと、(2)同分野で論じるテリトーリオこそ、他分野で論ずるパエサッジョにあたると指摘し、より広い視点をもつことを都市計画界に促した。テリトーリオとパエサッジョは同義であると述べ、テストを人類の歴史の総体的な足跡の表徴と定義した。

3.2 都市・地域計画におけるパエサッジョとテリトーリオの定義

前節でとりあげたセレーニ、ガンビ、トゥッリは社会、経済、技術を裏付けに、農業地域のパエサッジョ・ストリコを詳述しただけではなかった。三者とも、農地の市街化や耕作放棄地の急増を幅広い資料から把握し、農業地域のパエサッジョ・ストリコの窮状を指摘した。ガンビ、トゥッリは都市計画界の対応の遅れも指摘した。

本節では、1960年代後半から70年代の前半にかけて都市計画界で共有された、ヴィットリア・カルツォラーリによるパエサッジョ、ムラトリーによるテリトーリオの定義を検証する。

3.2.1 カルトゥオラーリによるパエサッジョの定義

カルトゥオラーリは「建築・都市計画事典」の編纂において、3.1でとりあげた3つのパエサッジョの概念を、都市計画家の立場から(1)文学、生物学、地理学、都市・地域計画学からのアプローチ、(2)クロウチェやアッスントに代表される審美的アプローチ、以上の2つに分類した。その前提にたち、パエサッジョを歴史的な人工物や自然物の組み合わせからなる体系(システム)として捉えることを提唱した。1973年には国際会議「パエサッジョの構成」で、パエサッジョを「テリトリーオのエコロジカルな側面と歴史的社会的経済的側面がひとつの体系となり、立ち現れたもの」と定義し、つねに「ダイナミックな進化」を伴うと述べた。カルトゥオラーリはまた、庭園の概念が時代を追うにつれて多様化、広域化した点に着目した。パエサッジョを庭園史の延長として解釈し、可能な限り広い範囲を一体として定義し、保存活用することを提唱した。その計画技術を絵画史上の用語である「景観形成法＝パエジスティカ」と呼び、緑地や自然を保存し、利活用するための計画とその技術全般と定義した。

3.2.2 ムラトリーによるテリトリーオの定義

ムラトリーは2.1でとりあげたテススト・ウルバーノの形成史の研究手法を発展させ、1967年に「テリトリーオのテススト＝テススト・テリトリーアレ」という概念を提唱した。テリトリーオを、原生的自然に刻まれた人類の足跡として認めうる最も広い範囲と定義した。人類の精神が4つの側面を有するというクロウチェの精神哲学を再定義し、その発展を4段階に分けた。発展の節目ごとに、文明に変化が生じ、テリトリーオの活用も変容したと論じた^{注10}。テリトリーオの活用の4段階を、(1)原始時代にあたる森林活用の段階、(2)古代エジプト第1中間期以前、シュメール文明などの農林業による土地利用の段階、(3)エジプト中王国期以降、バビロニア王朝などの貨幣経済社会の形成途上の段階、(4)ギリシア文明以降の4つの価値観^{注11}を伴い、安定的経済システム、キリスト教、大土地所有、国家体制という4つの土地所有形式が共存した、今日に至る時代とした。

4つの時代に共通する空間特性を、道、テススト、ノード、縁辺部から記述できるとし、テリトリーオの空間の質を表すのは空間

構造ではなく、面的に広がるテスストであり、その範囲を経済活動のために利用された土地、宗教的に意識された土地全域と定義した。

ムラトリーはテススト・テリトリーアレを(1)分水嶺と河川流域、(2)国土、(3)大陸という、社会的属性に応じた複数のスケールから設定した。具体的な事例研究も試みた。地形を山、斜面地、谷、平野という4つに類型化した。先に述べた4つの空間の特性から分析し、テスストの最小単位を、地形ごとの類型にそった農場とした。

その没後はパオロ・マレット、ジャンフランコ・カニッジャら、ムラトリー学派が研究を引き継いだ。マレットは、(1)テススト・エディリツィオ、(2)テススト・ウルバーノ、(3)テススト・テリトリーアレ、以上の3つのヒエラルキーからなる明快なテススト論を提示した。農場のテスストを類型化するうえで、家屋を農場全体の土地利用と関係づけてこそ、空間特性を把握できるとした。カニッジャはムラトリーの論考を体系化し、人類学的空間と呼び、普及に貢献した。実践面でもロンバルディア州コモ市周辺に分布する、ローマ起源の市街地と農業地域の地割り、同州の山裾に広がる丘陵地帯を対象に、「分水嶺と河川流域のスケール」における谷地形と丘地形、そこに分布する小河川と道のネットワークを研究した。

ムラトリー学派はきわめてまれにパエサッジョに言及したが、その関心はつねにテリトリーオを読むことにあった。

3.2.3 本節の考察

カルトゥオラーリの成果は、1973年の国際会議においてパエサッジョを、(1)行政界を示すテリトリーオの表徴として定義したこと、(2)歴史と自然からなるシステムとして定義したこと、以上の2点だった。ムラトリーの成果は、(1)文明の発展段階と定住環境の成り立ちが対応すること、(2)市街地、農業地域、原生的自然の有機的な関係をテスストとして論じること、(3)テススト・テリトリーアレは数段階のスケールから認識しうること、以上の3点だった。

トゥッリの定義も含め、パエサッジョとテリトリーオの複数の定義は構造的に整理され、両者の空間的領域は一致をみた。テリトリーオの歴史的な意味がよみがえり、テスストはその有機的な全体像をしめす概念として共有されるようになったと考えられる。

図1 パエサッジョとテリトリーオの概念的変遷とテスストの関係

4. 第2期2・パエサッジョ、テリトーリオの分析・計画手法の確立

パエサッジョとテリトーリオの定義づけと並行し、その保存活用に向けて近代都市計画の手法、チェントロ・ストリコの分析手法の応用が各地で模索された(図1)^{注12}。多岐にわたる課題は、(1)チェントロ・ストリコと農業地域の失われた関係の再生、(2)環境と歴史の概念の両立、(3)中山間地域における歴史的な農地の評価、(4)低密度市街地とそのテリトーリオの評価、以上の4点に整理することができる。

これらの課題に1970年代初頭から約10年をかけて取り組んだ結果、パエサッジョを土地利用、ついで景観構成要素から分析する手法が確立された。4.1で土地利用の評価基準を整理した1970年代中期まで、4.2で景観構成要素の分析の初期段階である1970年代末まで、4.4で土地利用と要素分析を両立し、テリトーリオ全域を分析する手法を確立した1980年代初頭まで、以上の代表的な事例の成果を検証する。

4.1 土地利用の定性的応用という視点の確立

上記(1)歴史的関係性の再生、(2)環境と歴史の両立、という課題に共通して必要とされたのは、パエサッジョやテリトーリオの全体像を定性的に把握することだった。これらの課題にたいして近代都市計画の手法である土地利用を応用する分析方法が検討された。

4.1.1 チェントロ・ストリコと農業地域を結びつける土地利用

本項ではデッティがジャン・フランコ・ディ・ピエトロ、ジョヴァンニ・ファネリとともに1965年に開始した研究をとりあげる。

デッティはトスカナ州の農業地域に点在する42の小規模なチェントロ・ストリコとその周辺を対象とした個票調査から、土地利用の変容の傾向を指摘した。当時は1.1(1)に記したテリトーリオという意識の喪失を、2.3でとりあげた市街地再生手法がさらに、チェントロ・ストリコと農業地域の関係を損なうかたちに助長していた。具体的にはa)住み手にとって認識しづらくなった歴史的環境の一体性、b)市街地の周りの農地にたいする新しい建造物のスプロール、以上の2つの新たな課題が生じていた。アステンゴとデ・カルロが回避を試みたこれらの課題が全国に共通することを、デッティが初めて立証した。デッティはチェントロ・ストリコと農業地域の双方で、19世紀後半と1950～68年の個票を同じ方法によって比較調査する方針を立て、ディ・ピエトロは市壁外を、最新的地籍境界が入った土地利用現況図として描き、変容の実態を詳述した。本調査をとおしてデッティは、チェントロ・ストリコとテリトーリオの一体的保存活用を訴え、2.2で言及した都市国家のテリトーリオの縁辺部を、歴史的な社会構造と経済、地形から判断しようと論じた。さらに土地利用計画を基本とした都市計画手法による地域の制御を示唆した。

4.1.2 パエサッジョの環境と歴史の概念を両立させる土地利用

本項ではマリオ・コッパが1972年に策定したアマルフィ海岸景観計画案と、環境保護団体イタリア・ノストラが市民運動として1976年に提案し、アッピア旧街道州立公園に発展した計画をとりあげる。

ジャコミーニとファリーニが参加したアマルフィ海岸景観計画案は、景観保護計画と観光発展計画をひとつの総合計画に仕立て、従来の景観計画よりも広大なテリトーリオを対象とした初の試みだった。複雑な地形にたいして、ジャコミーニは視認性が高い尾根筋に分布する森林の面的保護を考案し、ファリーニは海岸沿いと内陸の谷部に分布する定住環境を、用途に応じて細かく制御する手法を考案した。コッパはこれらの案を組み合わせ、景観計画を用途が重複せず、白地もないゾーニングに基づく土地利用計画として提案した。

ローマ市のアッピア旧街道周辺地区は既存の都市計画マスタープランや景観計画により線引きのみがされていた。同団体はカルツォラーリを中心に、ベネーヴォロが都市・地域計画学面を、ジャコミーニが植物学面を補佐する体制を整えた。都市緑地と都市公園の役割も兼ねた考古学公園計画を、詳細な土地利用計画を基本として提案した。植物学者らは牧草地の植生が自然環境保全に有益と指摘した^{注13}。

カルツォラーリは景観断面を作成し、その類型と土地利用を組み合わせた。アッピア旧街道周辺の自然と歴史を有効に保存するため、公園の計画範囲そのものも再検討した。その指標として水系と考古学遺跡に、とくに着目した。景観断面を利用した水系の分析により、生物圏のつながりを明らかにし、地上では離れて立地する複数の場所を関連づけた。ベネーヴォロによるチェントロ・ストリコの市壁の内外に分布する考古学遺跡にかんする既往研究は、チェントロ・ストリコとアッピア旧街道周辺地区を結びつけた。土地利用指定により、広大な歴史的空間の連続性を生み出す可能性をも示唆した。

4.2 景観構成要素の分析という視点の確立

本章冒頭の(3)歴史的な農地の詳細な分析、(4)低密度な定住環境の分析、という課題に共通して必要とされたのは、非建造物により景観構成要素を位置付け、適正な分析のスケールを把握することだった。これらの課題にたいしてチェントロ・ストリコの分析から発展、普及した建築類型学、都市形態学を応用する分析方法が検討された。

4.2.1 中山間地域における農地のパエサッジョの詳細な分析

人文地理学の分野では3.1.3でとりあげた歴史的農業地域の保護を早くから啓発してきた一方、空間的な分析手法を必要としていた。

ディ・ピエトロはファネリとともに1966年からトスカナ州アレッツォ県ティベリーナ地域の、文化財指定すべき地域資源を調査した。農業地域のパエサッジョ・ストリコを文化的景観と捉え、従来は調査の対象とされなかった(1)小規模な建造物群、農業地域や森林に点在する建造物の類型化、(2)ガンビの定義に基づいた農地の類型の、航空写真と状況写真を用いた視覚的資料化、以上の2点に取り組んだ。ディ・ピエトロはこの後、テリトーリオの形態学的研究から、パエサッジョの景観構成要素の類型学的分析に研究を広げた。

4.2.2 低密度市街地とテススト・テリトリアーレを分析する試み

ファリーニは4.1.2でとりあげたアマルフィ海岸景観計画案で地形と定住環境の関係を、市街地、道路、農地の立地という分析項目から形態学的に分析した。市街地の類型化の対象にチェントロ・ストリコのみならず、密度の低い定住環境も加えた。類型化の対象を、斜面地に造成された菜園や段畑といった農地や庭園の形状と作付け、街道や生活道、農道に広げ、農業地域のテスストを明らかにした。市街地から離れて単独で立地する小規模な宗教建築も、地形と関連付けることで類型化しようと論じた。形態学的視点と類型学的視点を組み合わせた分析方法として、初期の取り組みだった。

ベネーヴォロは都市計画顧問をつとめたトレント自治県で、1970年代末から歴史的定住環境の再生に向けた調査をした。テリトーリオの広範を農地、植林地、関連する第二次産業のために担保された空地が占めていた。県全域に点在する市街地のテスストのみを捉えたとしても、歴史的資源の一部にすぎないと指摘した。地域の状況を「テリトーリオを形成する歴史的マトリクス」とよび、建築類型学的視点、都市形態学的視点を複合した分析方法を考案した。(1)類型化の対象となる建築を広げたこと、(2)主たる施設や付帯施設

の配置とその外構、さまざまな規模の道路や水路を分析項目とし、空地の特性を浮き彫りにしたこと、以上の2つの結果を重ね合わせ、市街地の全体像と、その周辺のテリトリーオの関係を形態学的に分析した。とくに単独で立地する第2次産業用の施設は、建造物が同じ類型に属したとしても、業種によって屋外の利用方法、道の分布や市街地との関係に相違があった。そこで周囲のマトリクスの分析結果を、建造物の類型の評価項目に加える手法を考案した。

4.3. 土地利用と景観構成要素の分析にかんする3つの考察

本章でこれまで概観した5つの研究や計画を、(1)環境と歴史の関係、(2)建築類型と都市形態の関係、(3)計画学のうえで共有されたパエサッジョの2つのスケール、以上の3つの視点から考察する。

(1)環境と歴史という視点は、第6回 INU 大会以降の課題だった。アマルフィ海岸景観計画案では相互の視点が干渉しないようにし、アッピア旧街道の公園計画案では地表の土地利用と、地中の水系を2層と考え、両者が全域的に補完しあうことを立証した。こののち、環境と歴史という課題は、その優位性をめぐり議論されたとしても、a) 計画策定の上で両立すべき課題、b) 歴史評価は戦後の復興の展望に基づく必須課題、以上の2つの視座が整理された。bはイタリア都市計画の個性となり、拙稿でもこの点に着目して論を進める^{注14}。

(2)デッティはトスカーナの調査において、異なる時代のカタストを用いた個票の比較調査により、チェントロ・ストリコと農業地域双方の土地利用の変容を形態学的に分析しうることを立証した。ファリーニとベネーヴォロは個票の歴史的比較の結果から、建築類型学、都市形態学的手法を組み合わせる農業地域を読む新しい視点を導いた。とくに異なるスケールの類型を、形態分析によって組み合わせ、テスストまたはマトリクスを記述しうることを実証した。

(3)パエサッジョを都市計画手法である土地利用と、人文地理学の分野が論じた景観構成要素という2つのスケールから分析しうることを、実践面でも実証しえた。4.1でとりあげた3つの事例は、3.2.3で定義された、a) パエサッジョの領域とテリトリーオが一致すること、b) 歴史や環境という定性的評価基準を土地利用によって制御しうること、以上2点を示した。またデッティは、2.3でとりあげたアッシジ市の都市計画マスタープラン策定時にアステンゴが考案した、個票調査に基づく土地利用規制が汎用的であることを実証した。4.2でとりあげた3つの事例のうち、ディ・ピエトロとファリーニは、伝統的な農地の詳細な分析をとおして、パエサッジョに優劣をつける審美性という従来の評価基準を離れ、テリトリーオに分布する農地すべてが等しく文化的価値を有すると評価しうる道筋を開いた。ファリーニとベネーヴォロが実践した形態学的分析と類型学的分析の組み合わせは、詳細な分析による空間認識の可能性を広げた。

4.4 テリトリーオ・ストリコ全域の詳細なパエサッジョの分析

農業地域全体の土地利用と景観構成要素の分析を複合化する手法は、ファリーニ、建築史家ジョルジョ・ジャニギアンが1970年代末のほぼ同時期に確立した。文化的景観を念頭においた点、不動産登記資料を活用した点で共通していたが、その手法は異なっていた。

4.4.1 テリトリーオ・ストリコ全域の類型学的分析

ファリーニはウンブリア州テルニ盆地を事例研究の対象として、4.2.2でとりあげたアマルフィ海岸景観計画案の分析手法の精度をカタストを用いて高め、セレーニが描写した農業地域のパエサッジョ・ストリコを再生（レクーペロ）する手法を構築した。テリトリーオ

を盆地を囲む丘陵の分水嶺とし、数段階のスケールを設定したうえ、(1)テリトリーオの地形と土地利用の関係を時代ごとに分析する形態学的手法、(2)カタストから人為的につくられたものを、建造物に限らずに分析する類型学的手法、以上の2つを組み合わせた。そこから、a) テリトリーオ全域を地質、地形、土壌、植生から類型化したこと、b) テリトリーオ全域の土地利用の歴史の変遷を再現して地図化したこと、c) 農場の特徴を地形、土地利用、歴史的背景から8通りに分類し、それぞれを全体像、農場の区画形状、建造物、作付けという4つの観点から分析して類型化したこと（図2）、以上の3つの手法を確立した。cは3.2.2でとりあげたマレットが示唆したテリトリーオの小さな単位である、農場のテスストを具体的に分析した結果だった。一方、区画ごとの農地の形状、作付けの規則性を、例えば「混作農法のテススト」とよんだ。この視点はムラトリーによる「テスストを構成する建造物」に対応すると考えられる。ファリーニは4.3.(2)で述べたように、aとcの分析から導いた類型を形態学的に結びつけ、テリトリーオから建造物や作付けまで、その複合的な特徴を記述する方法を生み出した。テルニ市のチェントロ・ストリコとテリトリーオ双方の歴史の変容を共時的に分析したことも、それまでにはない分析だった。ファリーニはこの成果を元に実現しうる再生を、文化的整備と名付けた。

4.4.2 テリトリーオ・ストリコ全域の形態学的分析

ジャニギアンはヴェネト州アーゾロ市のテリトリーオに残る農業地域のパエサッジョ・ストリコの保存を目的に、1976年より調査を開始した。フランスの歴史学者マルク・ブロックの手法を参照しつつ、同地域の不動産登記資料を精査し、史料の正確さという意味で大きな発見をした。ヴェネツィア共和国時代の18世紀前半に作成された課税公図には、19世紀のオーストリア支配下の時代に利用されたカタストより、農地の優劣、農家の離れのような建造物の特徴や用途などの情報が豊富に掲載され、正確かつ詳細に往時の実態を把握しうることを立証した。そのため、18世紀の課税公図を基礎資料としたパエサッジョ・ストリコの調査を提唱した。コムーネ全域にわたって、カンボ・キウゾや樹木の植えられた農地、混作農法の作付け、農地の造成など、自然物を利用し、人為的に形成された農地の姿を形態学的に記録した。ジャニギアンの研究は類型化に向かうことはなく、歴史的な農地を特徴付ける景観構成要素を個別にリスト化した。これらの要素を、コムーネに分布する価値の高い建造物や市街地と等価に扱う意義を論じ、テススト・テリトリーアの正確な調査を、その後の地域計画の立脚点とすべきとも述べた。

4.4.3 本節の考察

ファリーニは類型学的手法と形態学的手法を複合化し、ジャニギアンは形態学的手法を採用し、カタストや課税公図といった不動産登記資料を分析した。両者に共通する成果は、(1)テリトリーオ全域を対象として4.3でみちびいた成果を、方法論として整理したこと、(2)人文地理学で論じられていた文化的景観を、都市・地域計画の手法で記述する方法を生み出したこと、以上の2点にあった。農業地域のテスストの類型化を試みたファリーニは、ムラトリー学派が提唱したテススト・テリトリーアレーの概念を具体化したといえる。ジャニギアンは社会的状況が史料の信憑性を左右することを示した。本章をつうじて考察した土地利用、景観構成要素の分析というふたつの分析手法は、両者の研究により高い精度を伴って体系化された。

5. 第3期・テリトリーオ全域をパエサッジョ・ストリコとした計画

1980年代に入り、国民の食の安全を求める社会運動、専門家を起用した啓発的出版物の相次ぐ刊行、制度の制定をととして、農業地域のパエサッジョ・ストリコは付加価値の高い生産の現場として多角的に再評価された^{註15}。EUの農業政策が環境保全型に転換し、経済的補助も担保された。復興の展望で提唱された3つの枠組みが連動する社会的経済的条件が整い、パエサッジョ・ストリコを保存し、テリトリーオ・ストリコを活用した地域づくりが実践可能となった。

5.1 都市・地域計画によるパエサッジョ・ストリコの制御

本節では1990年代に、啓発的な役割りを担った2つの都市計画マスタープランと1つの県の地域調整計画をとりあげる。いずれもこれまでにとりあげた調査研究の蓄積を背景に、(1)農業地域のパエサッジョ・ストリコを保存活用すること、(2)テリトリーオの一体性を取り戻すこと、以上の2点の実践を見据えた計画として策定された。

5.1.1 都市計画マスタープランによる制御

ベルナルド・セッキ、カルツォラーリらが策定し、1990年に施行されたシエナ市都市計画マスタープランは、(1)コムーネ全域の市街地、農業地域、自然を有機的に結びつけること、(2)従来は未指定だった緑地を環境価値の高い資源として再評価すること、以上の2点を基本的課題とした。カルツォラーリはa)地下水脈が形成する緑のシステム、b)農業地域の地質と作付けのシステム、c)農業地域の道と水利のシステム、以上の3つを、農業地域の保存活用の指標として位置づけた。4.1.2でとりあげた公園計画案で確立した景観断面の類型化を応用し、aとbの土地利用計画に反映させた。aではチェントロ・ストリコと森林公園や河川公園を結ぶ地下水脈を保護するため、さまざまな緑地を都市緑地に指定し、連続性を確保し、bでは伝統的な作付けが地形と地質を適切に考慮した結果だったことを立証し(図3)、cでは農業地域全域に点在するヴィツラから零細自作農まで、社会的属性に関わらず、全農家の水と道のネットワーク

図2 テルニ盆地に分布する農場の、8つのタイプの1例(平野部)

図3 シエナ市の景観断面

図4 シエナ県の景観重要地区

クに着目し、保護の対象とした。いずれのシステムもパエサッジョ・ストリコの保存と環境保全型農業を結びつける視点を有していた。

ファリーニは1994年にアッシジ市全域のテリトリーオ・ストリコを分析した。2.3でとりあげたアステンゴによる都市計画マスタープランは、論理的には農業地域を保護する厳密な仕組みを構築していたものの、現実にはパエサッジョ・ストリコの断片化が進んでいた。ファリーニはこの研究で(1)コムーネ全域の形態学的側面と類型学的側面を組み合わせた土地利用分析、(2)景観構成要素として作付け、農地の形状、水利を中心とした歴史的な基盤整備などの分析項目の多様化、以上の2点において4.4でとりあげたテルニ盆地の方法論を踏襲し、進化させた。上記(1)、(2)の調査結果から、ローマ時代とそれ以前、中世の時代、ルネサンス期から19世紀末、1960年、1980年という5葉からなるコムーネ全域の歴史地図を作成した。各時代の地図から、社会的経済的背景や宗教の影響によって、チェントロ・ストリコと農業地域の関係が大きく変容したことを明らかにした。先人はチェントロ・ストリコには常に住み続けたものの、ローマ人に開拓された平野部の農地は、中世の時代には戦場となり、丘陵地帯や山地に新たな農地が開拓された。ルネサンス期の平和の到来とともに平野部は再び農業の主たる対象となり、基盤整備にも投資され、今日のパエサッジョの礎が形成された。20世紀に入ると農業地域における建築行為や作付けの変更により、パエサッジョの断片化が進んだ。新たな視点として、断片化が進んだ農業地域であっても、景観構成要素が豊富にあれば、相互に補い緩やかな連続性により面的な広がり維持されることを指摘した。こうした農業地域の立地、基盤整備、農場の全体像、農地の区画、作付け、建造物など、歴史的な変遷を含めてパエサッジョを成立させてきた、多様な担い手の結びつきやコミュニティの仕組みを、ファリーニは社会的テススト^{註16}、その経済の循環を経済的テスストと呼んだ。

ファリーニは本研究結果を踏まえ、農業地域のパエサッジョ・ストリコを、より積極的かつ詳細に保護する必要を唱え、都市計画提案をした。同提案は採用され、2000年にコムーネ全域の8割以上を文化的資産、2割弱を緩衝ゾーンとして世界文化遺産に登録する根拠となり、のちに保存管理計画として採用された。2011年には、より精度を高めた「景観の質のためのガイドライン」となった。

5.1.2 県域調整計画による制御

ディ・ピエトロは1996年から翌年にかけて、36コムーネからなるシエナ県が策定した地域調整計画において、パエサッジョを保存する評価基準を、(1)県全域を分割した16の「景域=ウニタ・パエジスティケ」と18の「景観類型=ティピ・ディ・パエサッジョ」、(2)景観重要地区(図4)、(3)田園に立地する単体の歴史的建造物評価リスト、(4)農地の類型化、以上の4点にとりまとめた。(1)、(2)は土地利用、(3)、(4)は景観構成要素をつうじてパエサッジョを制御する組み立てだった。

景域を、歴史に裏付けられた文化的アイデンティティをもつ、安定した持続可能な定住環境と位置付けた。その範囲を、チェントロ・ストリコを含む市街地と、それらに帰属していた農業地域と自然地域を一体とした土地利用から定めた。景観類型を、数種類の農地と林地、市街地からなる今日の土地利用と、地質と岩質いう2つの指標からなる範囲とした。いずれもコムーネ以上に広く、複数のコムーネにまたがり、行政区とは一致せず、相互にも一致しない類型だった。景観重要地区はテリトリーオに点在する小規模なチェントロ・

ストリコと、その周囲の農地を一体の保存地区としたゾーニングだった。田園に立地する単体の歴史的建造物リストは、a) 用途、地形図とカタストの照合による歴史的評価、b-1) 保存状態、b-2) 内外の改造の状態、b-3) 景観構成要素としての今日的評価、c) 保存を担保しうる既存法の有無、以上の3つの評価基準から作成した。農地は15通りの類型に分類した。そのうち20世紀初頭までに完成した3種類の歴史的な農地の類型を、テスストと同義語であるテッシトゥーラとよび、パエサッジョの全体像における重要性を際立たせた。

5.1.3 本節の考察

本節でとりあげた3つの事例は、農業地域の評価手法を確立することによって、コムーネや県のテリトリーオ全域をパエサッジョ・ストリコとして制御しうることを示した、先駆的事例となった。

カルツォラーリの成果は、土地断面と水系のシステムを根拠として、歴史的な農業地域を環境面から面的に評価した点にあった。

ファリーニとディ・ピエトロに共通する成果は、個票調査に基づいて70年代から取り組んだ、土地利用と景観構成要素を結びつける研究のうち、とくに(1)類型学的分析の対象の多様化、(2)形態学的分析を裏付けとした段階的スケールの確定、(3)農業地域のテスストの意味付け、以上3つの側面を計画手法として実現した点にあった。

ディ・ピエトロの成果は、景域と景観重要地区を明確に線引きした点にあった。デッティによる中世の都市国家のテリトリーオ研究にたいし、前者は社会的経済的な結びつきのあった複数の中世の都市国家のテリトリーオを、後者はチェントロ・ストリコと農業地域を一体として制御するための具体的分析結果を導いたと考えられる。

ファリーニの成果は、パエサッジョ・ストリコとは視覚的に認識できるひとつの眺望ではなく、異なる時代の遺構が混在し、(1)文化の変節ごとに異なる土地利用や生活様式、(2)現状とは異なる分布を示していた先人の定住環境、(3)景観構成要素の多様化から理解しうる面的な連続性、以上3点を読みとりうることを明らかにした点にある。併せてテリトリーオの空間特性を支える社会的経済的テスストという概念を刷新し、世に問うたことも注目に値する。

5.2 文化的景観としてのテリトリーオ・ストリコ

1990年代に入り、EUにおけるパエサッジョの捉え方が変化した。その背景には、(1)1991年の欧州環境会議、1994年の地中海景観憲章、同年の国際自然保護連合の研究報告をへて、2000年に欧州景観条約が制定されたこと、(2)1992年にユネスコの世界文化遺産のカテゴリーに文化的景観が設立されたこと、以上の2つの経緯があった。ユネスコは欧州景観条約を受け、2003年以降の世界文化遺産の登録申請の条件に保存管理計画の策定を加えた。イタリア政府は2006年に、過去に登録した世界文化遺産にも、同計画の策定を義務づけた。

同国の地理学者らは3.1.3でとりあげたように、第1次産業による人為的なパエサッジョを常に、文化的景観と捉えてきた。ただしその客観的評価基準は、サウアーに着目した世界遺産委員会による世界文化遺産の指針によって、はじめてもたらされたと考えて良い。

5.2.1 文化的景観としてのオルチア川流域

テリトリーオの表徴をパエサッジョと捉えて都市・地域計画の手法で制御する方法は、社会的テスストを十分に活かしえず、地域づくりの手段として限界があることを、ファリーニは指摘した。ユネスコの文化的景観の保存管理計画を連動させ、パエサッジョ・ストリコを、より積極的に地域づくりに役立てる策を提唱した。

事例とするトスカーナ州シエナ県オルチア川流域芸術・自然・文化公園は、5つのコムーネ（カスティリオーネ・ドルチア市、モンタルチーノ市、ピエンツァ市、ラディコーファニ市、サン・クイリコ・ドルチア市）の9割以上の面積を占める。5つのコムーネとシエナ県は自主管理型自然保護区（ANPI）に分類される公園の設立を1999年にトスカーナ州に申請し、2004年に世界文化遺産に登録した。

保存管理計画を策定したファリーニは、5.1.2でとりあげたディ・ピエトロによる調査結果を活用しつつ、この地域のパエサッジョ・ストリコを、(1)オルチア川を囲んで多くの都市国家が分布していた時代のテススト、(2)シエナ共和国による統一後のテススト、(3)巡礼街道とその周辺のテススト、(4)折半小作制に端を発した農業地域としてのテススト、以上の4つのテスストと、その社会的テスストから成り立つとした。オルチア川流域は当初の自然保護の対象のみならず、歴史と環境というパエサッジョの2つの側面が密接に関係し、均衡してきたことを明らかにした。眺望の添景に過ぎなかった農業地域こそ、5つのコムーネの歴史を担い、持続可能な基幹産業の表徴であることを導き、(1)各々のチェントロ・ストリコとその農地がテリトリーオを形成していたこと、(2)シエナ共和国の支配下に入り、未開拓だったオルチア川兩岸の低地を囲む、ひとつの広域なテリトリーオを形成したこと、(3)それ以来、自然保護区の設立まで農地の開拓が続いたこと、以上の変遷を浮き彫りにした。

ファリーニはさらに、テリトリーオの社会的テススト、経済的テスストの持続を促す仕組みを提案をした。それまでの自然を保護し眺望を愛でる公園から、健全な基幹産業の維持を目的とした農業公園へ、その運営主旨を切り替える内容だった。テリトリーオの維持と成長管理の面で、(1)農業の再評価や支援に結びつく起業家や産業の誘致を支援できるコミュニティの体制を設けること、(2)公園管理団体として設立されたオルチア川流域有限会社を文化的景観の管理団体とし、地域のマネージメントにも活用すること、(3)州、県、コムーネの策定する都市・地域計画によってテリトリーオ全域を制御すること、以上の3点を促した。世界遺産登録以降、オルチア川流域における取り組みは成功を収めている。ただしこの事例は他に類似例がなく、その手法の普及については今後の展開を見守りたい。

6. おわりに

以上の通時の研究より、(1)復興の展望に記されたパエサッジョ・ストリコの保存は、都市分析の手法を応用した農業地域の入念な研究により可能になったこと、(2)同展望で提唱された3つの枠組みが連動し、テリトリーオ・ストリコを活用しえたこと、(3)パエサッジョ・ストリコとテリトリーオ・ストリコが一致をみたことから、前者の審美的、歴史的、環境的価値と、後者の社会的、経済的テスストという価値を、相互に付与しあう関係を導いたことを理解しえた。

その過程で(1)テリトリーオの有機的な全体像がテスストとして論じられたこと、(2)類型学、形態学を組み合わせ、土地利用と景観構成要素の双方から分析する手法が確立されたことを俯瞰しえた。

デッティによる中世の都市国家、カルツォラーリによる行政界、または歴史と自然のシステム、ベネーヴォロによるマトリクスは、いずれもムラトーリが文明論に基づき定義した幾段階かのテリトリーオに含まれ、ディ・ピエトロ、ファリーニ、ジャンギアンによる文化的景観は、そのある段階を広域かつ詳細に記述したといえる。

市街地、農業地域、周辺の自然からなるテリトリー・ストリコは、自然、社会、経済が合致した循環のシステムとして再評価され、21世紀に向けた価値観を伴うに至った。この成果は文化的景観の保存活用と同じ展望を有するというファリーニの発見にも結びついた。

拙稿において俯瞰したイタリアの農業地域の保存活用の歩みは、たとえば我が国の農業を基幹産業とする自治体において、歴史的景観を生かした地域づくりを推進するうえで、参照に値すると考える。

謝辞

本稿を記すにあたり、とくにローマ大学教授パオラ・ファリーニ氏には惜しめない協力を、ヴェネツィア建築大学教授ジョルジョ・ジャンギアン氏にも協力を頂きました。深い謝意をここに記します。

注

- 1) 陣内秀信「都市の思想の転換」、『都市の思想の転換点としての保存（都市住宅7607）』マルチェット・ヴィットリーニ責任編集、陣内編集協力、鹿島出版会、1976.7. 陣内『都市のルネサンス』中公新書、1978.5a. 陣内『イタリア都市再生の論理（SD選書147）』鹿島出版会、1978.11b. 田島学 & 陣内『イタリア都市形成史研究』『地中海学研究Ⅲ』地中海学会、1980. 野口昌夫：「イタリア歴史的都市の保存再生計画（パオラ・ファリーニ日本講演録）」『SPAZIO』46号、本オリベッティ広報部、1993.12, pp.22-34. 『イタリアの都市再生（造景別冊1）』陣内監修、ファリーニ、パオラ & 植田曉編集、建築資料研究社、1998. 11. 宗田好史『にぎわいを呼ぶイタリアのまちづくり－歴史的景観の再生と商業政策』学芸出版、2000.1. 植田「都市計画と景観活用の新しい展開－イタリア・グッピオ市を例に」『季刊まちづくり』15号、学芸出版社、2007.6. 野口『イタリア都市の諸相』刀水書房、2008. 植田「イタリアにおける都市・地域研究の変遷史－チェントロ・ストリコからテリトリーオへ」『水都学Ⅲ』陣内、高村雅彦編集、法政大学出版局、2015.2, pp.167-209.
- 2) 宗田「イタリア・ガラッソ法と景観計画」『リゾート開発と景観保全法（公害研究）』18(1)、岩波書店、1988.7, pp.15-27. 温井亨「ガラッソ法とイタリアの風景保全」『造園雑誌』56(5)、1993.3, pp.79-84. 宮脇勝；西村幸夫「イタリアにおける風景計画の展開 イタリアにおける歴史的環境保全計画に関する研究その1」『日本建築学会計画系論文集』第466号、1994, pp.123-132.
- 3) 宗田：『なぜイタリアの村は美しく元気なのか－市民のスロー志向に応えた農村の選択』学芸出版社、2012.8.
- 4) ファリーニ「イタリアの歴史的田園地域におけるアクティブな保存」『エコロジーと歴史にもとづく地域デザイン』（法政大学大学院エコ地域デザイン研究所編、陣内監修）、学芸出版社、2004.6. 植田「景観の保全計画と運用計画の複合性に関する研究、イタリア・トスカナ州シエナ県オルチャ川流域地域自然保護区を事例として」『景観のフロンティア』（総合論文誌第3号）、日本建築学会、2005.2. ファリーニ、玉井美子翻訳、植田翻訳協力・監修『第4回サス研フォーラム講演録・サステイナビリティと地域再生計画・イタリアにおけるオルチャ川流域とマントヴァの新たな経験』法政大学、2010.12. 植田：「オルチャ川流域：丘陵地に広がる防衛システムと農村景観地場産業の構造強化と環境保護を両立する地域づくり」、日本建築学会編『未来の景を育てる挑戦～地域づくりと文化的景観の保全～』技報堂出版、2011.8. ファリーニ「オルチャ渓谷の文化的景観－広域景観のための統合的保存管理ストラテジー：文化的景観のまもりかた～営みの真実性はどのように保たれるのか」『2014年度日本建築学会大会（近畿）農村計画部門パネルディスカッション資料集』日本建築学会農村計画委員会農山漁村文化景観小委員会、pp.5-11, 2014.9. 植田「農業地域とそのテリトリーオの動的真正性：アッジンジとオルチャ川流域の文化的景観」*ib.id.*, pp.41-45.
- 5) 第2章の執筆にあたり、参照した中心的文献を以下に列記する。Zocca, Mario: *Elementi per uno studio dell'urbanistica medioevale in Italia*, Roma, Armani di M. Courier, 1938.11. Piccinato, Luigi: *Urbanistica Medioevale*, Firenze, G.C. Sansoni Editore, 1943.5. Della Rocca, Aldo; Muratori, Saverio; Piccinato, Ridolfi, Mario; De Paoli, Paolo Rossi; Tadolini, Scipione; Tedeschi, Enrico & Zocca: *Aspetti urbanistici ed edili della ricostruzione*, Roma, 1944-45, 本宣言文は Giovanni Bentivoglio によって復刻された。Viterbo, Lo stabilimento tipografico Agnesotri, 2007.3. Bardet, Gaston: "Il tessuto urbano, nuovi metodi di analisi e sintesi," *Urbanistica* N.4, Roma, INU, pp.20-34, 1950. Aymonino, Carlo: *La città di Padova, Saggio di analisi urbana*, Roma, Officina, 1970. Rossi, Aldo: *L'architettura della città*, Padova, Marsilio, 1966. Muratori: *Storia e critica dell'architettura contemporanea*, Roma, Centro studi di storia urbanistica (CSSI), 1980. 本書はムラトリーの初期の論文集にあたり、収録された4編の論文（Disegno storico degli sviluppi architettonici attuali(1944), Saggi di critica dell'architettura

contemporanea (1946a), La valutazione dell'opera architettonica (1946b), Saggi di metodo nello studio dell'architettura (1946c)) は、後の研究の礎となった。Muratori: "vita e storia della città," *Rassegna critica di architettura* N.11-12, Roma, M.Danesi, 1950, pp.3-54. この時期にムラトリーは独自の建築類型を考案し（Muratori(1946c)）、テッスートの概要を記した（Muratori(1950)）。Muratori: *Studi per una operante storia urbana di Venezia*, Venezia, Istituto Poligrafico dello Stato, Libreria dello Stato, 1959. Muratori: *Studi per una operante storia urbana di Roma*, Roma, Consiglio Nazionale delle Ricerche, 1963. ムラトリーは建築類型とテッスートの概念を融合し、テッスート・ウルバーノ論を確立し、陣内（1978b）が紹介した2つのフィールドワーク「ヴェネツィアの実践的都市史の研究（Muratori(1959)）」、「ローマの実践的都市史の研究（Muratori(1963)）」で、その可能性を実証した。AAVV: "Difesa e valorizzazione del paesaggio urbano e rurale," *Urbanistica* N.23, Torino, INU, 1958.3, pp.115-120. Samona, Giuseppe, et al.: "salvaguardia e il risanamento dei centri storico-artistici," *Urbanistica* N.32, Torino, INU, 1960.12, pp.65-84. Anon: "Il convegno sulla salvaguardia e il risanamento dei centri storico-artistici, dichiarazione finale," *ib.id.*, pp. 65-66. この宣言は後に「グッピオ憲章」と呼ばれるようになった。全文の邦訳は陣内監修、ファリーニ、植田共同編集（1988）「グッピオ憲章 60（全文）」*op.cit.*, p.154. Marconi, Plinio: *Il territorio della media valle del Tevere, la pianificazione territoriale comprensoriale*, Roma, Tipografia regionale, 1966. 大谷幸夫他：集住体モノグラフィ3、語りかける中世イタリアの山岳都市・テベレ川流域（都市住宅別冊）、鹿島出版会、1976.6. Detti, Edoardo: "Lo studio degli insediamenti minori. Alcune comunità della Lunigiana e della Versilia," *Urbanistica* N.22, Roma, INU, 1957.7a, p.111, p.120. Detti: "Urbanistica medievale minore," *La critica d'arte* N.24, Vallecchi Editore, Firenze, 1957.11-12b, pp.499-500, p.502. Coppa Mario & Ottolenghi Marinella: "Il contado perigino, interpretazione di un comprensorio medioevale," *Urbanistica* N. 26, Roma, 1959.3, pp.38-53. Coppa: *I centri storici nella Valle del Clitunno, materiale grigio*, Perugia, CRPSEU, 1962, (Ricerche sull'urbanistica ed il turismo, N.10.2). Astengo, Giovanni: *Urbanistica* N.24-25, Torino, INU, 1958, p.2, pp.9-28, pp.79-80, p.85. De Carlo, Giancarlo: *Urbino, La Storia di Una città e il piano della sua evoluzione urbanistica*, Milano, Marsilio, 1966, pp.105-106, pp.117-119, pp.128-137, pp.209-213. De Carlo: "Problemi del P.R.G. di Urbino," *Questioni di architettura e urbanistica*, Segrate, Maggioli editore, 2008, pp.103-129.- 6) この宣言において歴史的芸術的街区（チェントロ・ストリコ・アルティスティコー centro storico artistico）という表現が初めて用いられ、歴史的市街地そのものが芸術的に価値あることが明文化された。
- 7) バルデはテッスート・ウルバーノを、地割りを基本として分析した。カタストの個票ごとの調査、住民の社会的属性、個々の建造物の利用状況の調査を組み合わせ、市街地をひとつの有機体として把握できると論じた。またその結果を市街地の規模を問わず、ダイアグラムとして描きうるとした。ムラトリーはテッスート・ウルバーノを、都市の有機的な全体像と定義した。都市の本質を時間的な連続性と論じ、ひとつひとつの都市に備わる固有の歴史的連続性を研究することによってのみ、その有機性と成長を捉えうると説いた。陣内はバルデ、ムラトリー双方の論旨より都市組織という邦訳を与えた。「歴史の中で長い時間を掛けて形成されてきた有機体として見る。すなわち、それを構成する各部分が相互に関係を持ちながら変化、置換を続け、全体として調和的に緩やかな成長、変化を続けていくものとして捉えるのである。都市有機体の細胞、すなわち都市の構成単位の建築は、それだけで独立して形成されるのではなく、都市のトータルな環境系の中で形づくられるものである。その環境系は厳密には、地割、街区形態、空地・道路システムの中に建築が集合し、秩序づけられながら織り成されている都市組織として捉えられる。（陣内 1978a）」、「（歴史地区）を構成している建築、道、広場等によって織り成される（陣内 1978b）」と説明した。
- 8) 第3章の執筆にあたり、参照した中心的文献を以下に列記する。Benevolo, Leonardo(1958): "il piano regolatore," *Urbanistica* N.23, Torino, INU, 1958.3, p.159. Aldo Sestini: *Il Paesaggio, Conosci l'Italia* vol.7, Milano, Touring Club Italiano, 1963. Guido Ferrara: *L'architettura del paesaggio italiano*, Padova, Marsilio, 1968. カンボレージ, ピエーロ（中山悦子訳）：「風景の誕生」筑摩書房、1997.6. Croce, Benedetto: *L'Estetica come scienza dell'espressione e linguistica generale*, sesta edizione, Bari, Gius. Laterza & Figli, 1928, p.17. 本書の第1版は1902年にR. Sandronより出版された。Settis, Salvatore: *Benedetto Croce ministro e la prima legge sulla tutela del paesaggio*, Venezia, 2011. Parpaghiolo, Luigi: *Elementi di legislazione agraria e notizie sui trasporti e sulle dogane*, Roma, Libreria del polidivino, 1904. Parpaghiolo: *Codice delle antichità e degli oggetti di arte*, Roma, Ermanno Loescher & C., 1913, pp.21-23, p.84. Croce: *Per la tutela delle bellezze naturali e degli immobili di particolare interesse storico*, 1920. 本稿は同年9月25日上院における立法にむけて議案を提出した際の実稿にあたる。Falini: *Ambiente, cultura e paesaggio - un caso Europeo*, 2008.2. 同月9日に、ふれあいセンターびらとりで開催された平取文化的景観フォーラム基調講演より（植田による全文翻訳付パワーポイントを上映）。Parpaghiolo: *Intorno alla legge in difesa delle bellezze naturali e del paesaggio*, 1931. 本稿はパレルパオロによる講演原稿にあたる。Assunto, Rosario:

- "il tempo della natura e la sua immagine," *il paesaggio e l'estetica*, vol.1, *natura e storia*, Napoli, Giannini editore, 1973, pp.71-145. Giacomini, Valerio: *La flora - Conosci l'Italia* vol.2, Touring Club italiano, Milano, 1958, p.9. Giacomini: "Agricoltura e ambiente - l'anno europeo, per la conservazione della natura," *Agricoltura* N.7, Roma, Istituto di tecnica e propaganda agraria, 1970, pp.1-8. Giacomini: "Per un parco nazionale dell'Etna," *Tecnica Agricola* A. XVIII, 1, Catania, Associazione dei dottori in scienze agrarie della provincia di Catania, 1966a, p.11. Giacomini: "L'Etna Parco Nazionale: un paesaggio incomparabile da salvare e valorizzare," *Italia Forestale e Montana*, Anno XXI, 3, Firenze, Accademia Italiana di Scienze Forestali, 1966b, p.29. Giacomini: *Conservazione della natura e del paesaggio*, Trento, Museo tridentino di scienza naturali, 1967, pp.26-27. Romani, Valerio: *Storia ed evoluzione del concetto di paesaggio* *Paesaggio e pianificazione - Il paesaggio bresciano trasformazione e problemi*, Brescia, ATENEON, 1991. Nice, Bruno: "geografia e urbanistica," *Urbanistica* N.3, Roma, INU, 1950, pp.7-10. 竹内啓一「イタリアにおける地理学」『人文地理』vol.17, No.5, pp.518-537, 1965. Biasutti, Renato: *Il paesaggio terrestre*, 2nd ed., Torino, UTET, 1962, pp.155-159. Sestini: "Il paesaggio antropogeografico come forma d'equilibrio," *Bollettino della Società geografica italiana*, 1947, pp.1-8. Sereni, Emilio: *Vecchio e nuovo nelle campagne italiane*, Editori Riuniti, Roma, 1956, pp. 63-99, pp.273-370. 本書の邦訳に、エミリオ・セレーニ：中村丈夫，植原義信訳，「イタリア農業の構造的改革－イタリア農村の古いものと新しいもの」（三一書房，1959，pp.47-71，pp.187-250）がある。Sereni: *Storia del paesaggio agrario italiano*, Bari, Laterza, 1961, p.98, pp.381-387. Gambi, Lucio: *Critica ai concetti geografici di paesaggio umano*, Faenza, F.lli Lega, 1961. Gambi: "I valori storici dei quadri ambientali," *Storia d'Italia* vol.1, Torino, Giulio Einaudi Editore, 1972, pp.3-60. Turri, Eugenio: *Antropologia del paesaggio*, Milano, Edizioni di Comuruta, 1974, pp.11-23. Sauer, Carl Ortwin: *The Morphology of Landscape*, University of California publications in geography Vol.2, No.2, Berkeley, University of California press, 1925.10, pp.19-53. Turri: *Semiologia del paesaggio italiano*, Venezia: Marsilio Editore, 1979(1mo ed.), 2014(3zo ed.). Calzolari, "paesaggio," "paesistica," "parco," *Dizionario enciclopedia di architettura e urbanistica* IV, Roma, Istituto editoriale romano, 1969, pp.333-334, pp.335-339. Calzolari: "Concetto di paesaggio e paesistica," *Architettura del Paesaggio*, Firenze, La Nuova Italia, 1974, pp.73-88. Muratori: *Civiltà e territorio*, Roma, C.S.S.U., 1967, pp.196-198. Muratori: *Autoscienza e realtà nella storia delle ecumeni civili*, lizione 1971-72, Marinucci, Guido (a cura), Roma: C.S.S.U., 1976, pp. 426-457. Croce(1928): pp.60-74, pp.141-152. Muratori(1976): pp.56-58, pp.427-452. 陣内(1978a): p.17. Maretto, Paolo: *Nell'architettura*, Firenze,Teorema, 1973, pp.222-237. Caniggia, Gianfranco: *Lettura di una città: Como*, Roma,C.S.S.U., 1963, pp.33-39. Caniggia: *Strutture dello spazio antropico*, Uniedit, Firenze,1976, pp.111-114, p.147, pp.191-195, p.217. Cataldi, Giancarlo: *Saverio Muratori: architetto(1910-1973)*, Firenze, 1984, pp.110-113, 126-137.
- 9) ジャコモニーは、国内的には生物圏保存地域（riserva della biosfera）設立を目的とした国立公園法の制定にむけて、国際的にはユネスコの「人間と生物圏計画（MAB-Man and the Biosphere Program）」の中心的委員として、イタリアの自然保護区の設立に貢献した。1974年には後者の立場で、後にエコロジカル・ネットワークと呼ばれる概念を提唱したという。
 - 10) ムラトリーは人の精神が論理性、経済性、倫理性、審美性、以上の4つの側面から成り立つとした。これはクローチェによる直観的認識行為（審美性）、概念的認識行為（論理性）、経済的行為（経済性）、道徳的行為（倫理性）からなる4つの精神活動の定義と順位を応用した考えだった。テリトリーオの形成には、審美性以外の3要素が優先するとムラトリーは論じ、クローチェによる順位を、論理性を最上位、審美性を最下位におきかえた。
 - 11) ムラトリーは4つの価値観を2つの時代に区分した。前半をギリシア文明による芸術、都市国家の概念、科学、形而上学的論理とした。後半をローマ時代より今日まで続く、私法、公法、教会法、絶対君主制からローマ法大全にいたるローマ時代の幅広い法体系による価値観、とした。
 - 12) 第4章の執筆にあたり、参照した中心的文献を以下に列記する。Detti; Di Pietro, Gian Franco & Fanelli, Giovanni: *Città murate e sviluppo contemporaneo - 42 centri della Toscana*, Milano, C.I.S.C.U., 1968. Detti: "Città murate e sviluppo contemporaneo," *ib.id.*, pp.7-11. Di Pietro: "Gli insediamenti e gli assetti territoriali medioevali in Toscana-Ipotesi per una classificazione," *ib.id.* pp.16-24. Coppa; Giacomini; & Falini: *Studio preliminare piano territoriale paesistico della costiera amalfitana*, Roma, s.n.e., 1972. Giacomini: "I paesaggi vegetali," *ib.id.*, pp.81-90. Falini: "Analisi dei centri abitate il loro contesto ambientale, Elementi di formazione del campo," *ib.id.*, pp.119-128. Falini: "Elementi di formalizzazione del campo. Le figure ambientali," *ib.id.*, pp.131-161. Calzolari & Olivieri, Massimo: *Piano per il parco dell'Appia Antica*, Roma, Italia nostra (sezione di Roma), 1984. Calzolari: "La proposta di piano per il parco dell'Appia antica," *ib.id.*, pp.157-175. Battista, Antonio & Giacomini: "il paesaggio vegetale del comprensorio dell'appia antica," *ib.id.*, pp.47-54. Giuseppe Gisotto: "Analisi ecologica e utilizzazioni prevedibili del territorio," *ib.id.*, pp.55-58. Benevolo: *Roma da ieri a domani*, Bari, Laterza, 1971. Di Pietro & Fanelli: *La Valle Tiberina toscana* (a cura dell'Ente provinciale per il turismo), Firenze, Le Arti Grafiche Alinari Baglioni, 1973.11. Di Pietro: "La formazione storica del territorio della Valle Tiberina Toscana - Le strutture territoriali," *ib.id.*, pp.XIX-XL. Di Pietro: "Le strutture territoriali," *ib.id.*, pp. xxxiii-xiv. Anon. (Provincia autonoma di Trento, servizi dell'urbanistica): *Il ricupero degli insediamenti storici come alternativa allo spreco delle risorse*, Trento, Pezzini, 1981. Anon.: "Analisi dei centri aggregati," *ib.id.*, pp.153-155. Anon.: "Proposta di metodo per l'analisi del territorio Trentino," *ib.id.*, pp.117-121. Falini; Grifoni Cristina & Lomoro Annarita: "Struttura agrarie storiche e fonti catastali geodetiche, alcuni questioni e proposte di metodo," *Fonti per lo studio del paesaggio agrario*, Martinelli, Roberta & Nuti, Lucia (a cura), Lucca, CISCU, 1981a.9, pp.345-356. Falini; Grifoni & Lomoro: "Conservation planning for the countryside, a preliminary report of an experimental study of the Terni Basin," *Landscape Planning* 7, Amsterdam, Elsevier Scientific publishing company, 1980. Falini; Grifoni & Lomoro: "Tipologie agrarie storiche e pianificazione territoriale," *agricoltura ambiente* N.11 annoIII, Roma, F.lli Palombi, 1981b.6. Gianighian, Giorgio: "Ricerche sulla conservazione e sul restauro territoriale nell'area veneta," *La scienza e la conservazione dei beni culturali*, Padova, Marsilio, 1979. Gianighian: "Ritratto delle cose di campagna/2, case e colture a Castelnuovo (Asolo) 1713-1841," *Parametro* N.90, Faenza, Faenza editorice, pp.26-35, pp.57-58, 1980.10. (ジャンギアンの研究は例えば Dario Paolucci, Matteo: "Il paesaggio agrario tra conservazione e restauro," *Urbanistica* N.120, Roma, INU Edizioni srl, 2003.4, p.91-101 として引き継がれた)
 - 13) 農業地域を都市緑地として担保する手法には、宗田好史が早い時期に着目し、日本に紹介した。宗田（1988年）p.22を参照されたい。
 - 14) 環境としてのパエサッジョにたいする取り組みが世界的に共通する価値を目指したのにたいし、歴史としてのパエサッジョの取り組みは、イタリア独自の文化の表徴の保存と、今日的な価値付けを目指した。環境と歴史の概念のうち、前者を優位に扱った先駆的都市計画家としてマルチェロ・ヴィットリーニやジュゼッペ・カンボス・ヴェヌーティ、その次世代としてロベルト・ガンビーノやグイド・フェッラーラがいる。
 - 15) 第5章の執筆にあたり、参照した中心的文献を以下に列記する。植田（2015）: p.187-190. Comune di Siena: *Piano regolatore generale*, Siena, 1990. Gabellini, Patrizia: "Il progetto di piano," *Urbanistica* N.99, Milano:INU, pp.32-50, 1990.6. Di Biagi, Paola: "Antologia," *ib.id.*, pp.51-81. Rallo, Daniele: "Progetto V.e.n.u.s. Valutazione della eseguibilità dei nodi urbanistici di Siena," *ib.id.*, p. 81. Secchi, Bernardo, "Siena," *ib.id.*, pp.82-88. Falini: "Nuovi piani e riqualificazione dell'esistente," *Rassegna di architettura e urbanistica* anno XXIV n.71-72, Roma, Kappa, 1990.9-12, pp.31-57. ファリーニ「シエナ－中世山岳都市の再生－新しい文脈で都市を読む」陣内監修，ファリーニ・植田編集（1998），pp. 69-72. Calzolari: "Siena, paesaggi dei tufi, delle crete e dei calcari," *Rassegna di architettura e urbanistica* anno XXVII n.80-81, Roma, Kappa, pp.35-50, 1993.5-11. カルツォーリ：「シエナの農業景観」陣内監修，ファリーニ・植田編集（1998），pp.138-141. Falini: *Comune di Assisi - Variante generale al piano regolatore generale - I valori storico ambientali del territorio rurale*, 1994. Falini: "Il territorio storico di Assisi :Una <descrizione di sfondo> per il nuovo PRG," *Rassegna di architettura e urbanistica* anno XXIX n.86/87, Roma, Kappa, 1995.5-12. ファリーニ：アッジジの農業景観，宗田訳，陣内監修，ファリーニ・植田編集（1998），pp.142-147. Comune di Assisi: *Linee guida per la qualità del paesaggio di Assisi*, 2011.11. Ufficio di piano di PTC di Provincia di Siena: *Quadro conoscitivo del Piano territoriale coordinamento provinciale*, 1997. Di Pietro, Gian Franco & Gobbo, Teresa: "Il paesaggio come fondamento del Ptc di Siena," *Urbanistica Quaderni* n.36, Roma, INU, 2002. UNECE: Conclusions of the conference "Environment for Europe," Dobris, 1991.6. <http://www.unece.org/fileadmin/DAM/env/efe/history/200f20Effe/Dobris.E.pdf> (accessed 2009-05-10). Le Regioni dell'Andalusia, del Languedoc-Roussillon e della Toscana: Carta del paesaggio mediterraneo, 1994.3, http://www3.unisi.it/did/dip-direcon/carta_medit.pdf (accessed 2009-05-10). IUCN: "Protected areas and key sectors of public policy - agriculture," *Parks for Life : Action for Protected Areas in Europe: Action for Protected Areas in Europe*, Glan, Martinpiano oy, pp.30-34, 1994. Fowler, Peter J.: *World Heritage Cultural Landscapes 1992-2002*, Paris, UNESCO World Heritage Centre, pp.18-23, 2003. Congress of the Council of Europe: *Convenzione europea del paesaggio*, Firenze, 2000.10. http://www.convenzioneeuropeapaesaggio.beniculturali.it/uploads/2010_10_12_11_22_02.pdf (accessed 2009-05-10). World heritage committee: *Convention concerning the protection of the world cultural and natural heritage fifteenth session, Carthage*, 1991.12. Falini & Val d'Orcia srl: *Piano di gestione della Val d'Orcia*, 2002. Falini & Val d'Orcia srl: *Piano di gestione della Val d'Orcia*, 2010. ファリーニ（2010.12），pp.14-18. ファリーニ（2014.9），pp.5-11.
 - 16) ムラトリー（1967），p.298（参照）は社会的テッスートという用語に触れ、テリトリーオの概念に関連づけた。一般的にはテッスート・ウルバーノと対をなすかたちで1970年代から住民参加に高い関心を示したデ・カルロをはじめとした建築家によって活用された。当時は参加型まちづくりの地権者や市民による組織体をさす場合が多かった。ファリーニはパエサッジョを形成する、幅広い担い手による社会的な全体像をひとつの組織体として再定義した。ただしテッスート・ウルバーノが社会的意味合いを含むように、社会的テッスートもテッスート・テリトアーレを俯瞰的に示す場合もある。

DIACHRONIC STUDY OF CONSERVATION AND UTILIZATION OF HISTORICAL LANDSCAPE IN AGRICULTURAL REGIONS WITH ITALIAN TERRITORIAL PLANNING AFTER SECOND WORLD WAR

Satoshi UEDA *

* NPO Network for community development with landscape, M.Eng.

In Italy, the conservation and utilization of regional historical resources are values that have always coexisted with modern urban planning. They are more than physical accomplishments that value the authenticity of architecture, buildings, cities and landscapes. Their purpose is to conserve the historical regional community and its economic activities, give added value and exert synergic effects to aim for the recuperation as a sustainable region. They are similar to the particular vision of the recent working in Japan that is being referred to as "regional development that draws on history." This paper attempts to shed light on the mechanism of how regional management came to be by studying the genealogy of urban and regional planning. The focus of the study target will be the agricultural region.

Even before World War II, urban planners were aware of this subject. With post-war reconstruction, they commenced their studies, aiming for the conservation of the historical landscape (*paesaggio storico*) in the agricultural region. The post-war agricultural region underwent a major transformation due to changes in the scope of the plowed land and in planting which in turn were characterized by background factors such as population declines. To analyze the historical landscape of the agricultural region, urban planners employed a method to analyze and examine the ancient cadastre and cadastral map (*catasto*, *cabreo*, etc.), the produced results of past analyses and planning of historical urban centers. They also used the "tessuto" (based on the urban tissue concept - *tessuto urbano*) concept and its underlying two methods to draw a whole picture of the agricultural region, building typology (*tipologia edilizia*) and urban morphology (*morfologia urbana*).

Until the 1960's, urban planners, led by the National Urban Planning Institution, worked to formulate a reconstruction perspective and an actual scheme that drew on history. Concurrently, they engaged in advanced research and planning. By the early 1970's, aiming for the conservation of historical landscapes, they had established a modern concept for the landscape and region, having been influenced by aesthetic philosophy, biosphere-based botany and human geography. In the early 1980's, a planning method from a botanical perspective and one from a human geography perspective were set up. Both planning methods value history but their differences lie in the definition of the landscape unit. The planners of the latter, in particular, used a method of building typology to analyze both the historical produce of the agricultural region and historical planting technology evolving the "tessuto territoriale" (regional tissue) concept. By the latter 1980's, many citizens came to reassess the value of the historical region (*territorio storico*). This led to civilian movements such as the leading slow food movement. With EU's policy shift to environmental farming, it was now possible to use urban management to sustain agricultural regions that possessed historical landscapes. As a result, since the 1990's, innovating a concept, the "tessuto sociale" (social tissue) which mainly used for a participation planning method specially in 1970's, historical landscapes of agricultural regions have been conserved in urban and regional planning through the master urban plan and such.

A topic that emerged next to manage the agricultural region was the nurturing of leaders, construction of a community recuperation model and sharing of this methodology. After 2006, urban planners came up with urban regional planning methods to connect the preservation of physical historical landscapes, a UNESCO world cultural heritage, to the recuperation of regional social and economic foundations. They accomplished this through the management plan of cultural heritages and by using methods such as the urban master plan. This is how the scheme to utilize historical properties of a region came to be completed.

(2015年4月10日原稿受理, 2015年10月6日採用決定)